

戦火の弘法大師

この前の戦争のときのことです。日本の兵隊が中国で戦っていました。

あるとき、戦闘機が三機、飛行場にもどってきて格納場所に入る

うとしました。ところが、二機は決まった場所にすうつと入ったの

ですが、一機だけは違った方向へ行つて止まり、動かなくなりました。早く飛行機を隠さないで、空を飛んでいるアメリカ軍の飛行機に見つかったらたいへんです。そこで、整備兵が十五人ほど出て、「わっしょい、わっしょい」と、飛行機を木の陰に押しこめました。

ところが、あわてていたので、だれも高圧線があることに気づきませんでした。それで、飛行機のアンテナがバツと高圧線に引っかかってしまったのです。とたんにブワツともすごい音がして、飛行機もろとも整備兵たちはみんな吹っ飛ばしてしまいました。

しばらくして、兵隊たちが助けにかけつけましたが、みな死んでいました。そのとき、だれかが、

「こいつ、生きてるぞ。動いたぞ」とさげびました。ひとりだけ生きていたのです。

十五人のうちひとりだけ助かって、あとはみな戦死です。助かった人が、こう話していました。

「バーンと飛ばされたとき、あたりが真っ赤になったんだ。しばらくしたら、光がシューツと上がって、その中から弘法大師さまが現れたんだよ。たしかにおれは、弘法大師さまを拝んだと思う。そのとき、『こいつ、生きてるぞ』という声がして目が覚めたんだ」

原話：『子どもと家庭のための奈良の民話』

共通語再話：村上郁

